

ニッポンの想像を超える未来

Vol.1

未来の水族館

水族館プロデューサー
中村元さん

100年後の水族館帰りの家族連れ（プロローグ）

子ども：100年くらい前は、水族館はもっとすごく大きかったんだってね。

親：そうだね、今は、大きな水族館は少なくなったね。

子ども：VRはあった？

親：ないはずだなあ。VRは今でも、まだ100点満点とはいかないけど、それでも100年前に比べると雲泥の差じゃないかな。今はジャンプした時のイルカの視界や、深海の様子はかなりのリアリティをもってVRで疑似体験できる。大きな水族館の代わりにコンビニに行くような気軽さで水中世界を楽しめるのもあるね。

子ども：どこの街にも水族館があるし、水族館ってすぐそばにあるものだと思うよ。

親：そんな水族館での観察の結果、水中生物が人とのやりとりを面白がっていることもわかってきているみたい。そこで、マンションのエントランスに水槽が置かれていて、生物とのふれあいを日常的に楽しむことができるスペースもあったりするよね。

想像を超える未来へと挑む現在の水族館へ



“魚の観察”ではない、水を楽しむ水族館とは

中村さん以前の水族館と以降の水族館



現在の先進的な水族館についてお話を伺うのは水族館プロデューサーの中村元さん。都会の空をペンギンやアシカが泳ぎ回る天空のオアシス、マイワシの大群が刻々と形を変えながら泳ぐ大水槽——中村さんは従来の概念を覆して水族館の新しい魅力を引き出してきた。

最初に中村さんプロデュースの水族館を訪れた人たちは、「今までと何か違う」と感じたかもしれない。

これは、水族館の成り立ちとも関係がある。それまでの水族館は、「動物園の水中版」として、動く魚を実際に見て、それぞれの生態や行動について造詣を深める「生物、もっと言えば“理科教育の場所”」という側面が強かった。さまざまな種類の生物を分類して展示し、客はそれぞれの水槽を観察する。例えば、動物園では「ライオンとトラは同じネコ科の動物だけど、こんなところが違う」と、それぞれの動物を実際に目で見て確かめる。水中生物についても同じことをやろうとして生まれたのが水族館だというのだ。

確かに、生涯学習という視点からすれば、動物園も水族館も非常に有用な施設だ。知的好奇心を満たし、生物に関する教養を身につけることができる。象やイルカなど、身近にはいない本物の動物と出会う場所でもある。ただ、今のような水族館が登場する以前、大人が楽しめる場所として水族館に足を運ぶことはあっただろうか。そんな疑問が中村さんには、あった。

ニッポンの想像を超える未来

中村さんは言う。「長年、水族館に勤務していたのですが、私自身、実は水槽の魚を見ているおもしろくない(笑)。でも水族館にいること自体は好きだった。どうしてだろう?と考えました。すると、飽きずに見ていられる水槽があることを思い出しました。その水槽は、訪れるお客さんたちにも人気があり、立ち止まる人も多い。よくよく観察してみると、そこにはたくさんの種類の魚が泳いでいて、奥行きもあり、まるで海の中をのぞいているようでした。『そうか、大人にとっては本物の生き物に会うことだけでなく、自然界を垣間見る体験も魅力的なんだ』と、その水槽を見ていて気付いたのです。



海の中を模した水槽は、きれいに流れていく泡を見つけたり、水中で魚のうろこが反射してキラキラと光っていたり、陸上とは違う世界があります。子どもの頃に水中眼鏡を付けて海や川へ潜ったときに見た光景を、追体験しているのかもしれない。水族館は自然体験を味わえる場所でもあるのです。」

“理科教育型”水族館は必要だが、魚に興味がない人にとって縁遠い存在となってしまう。そこで、せっかくの水族館という施設を、「大人が行きたい」と思う場所にするにはどうするか、何が大人の心を刺激するのか。中村さんは考えるようになったという。水族館の新しい時代が始まった。

水中世界を塊で展示。「見る」から「体感する」へ

水中の世界をのぞき見ることができるというのは、動物園にはない水族館ならではの面白さだ。中村さんがリニューアルやオープンに関わった水族館では、海の中や川の中をそのまま再現したかのような展示が多く、どれも新鮮で迫力がある。キーワードは「水塊」だ。

「海の中を塊で持ってこようと考えたんです。海や川に潜ったときの水中の光景や水の中に漂う浮遊感を、どうにか水族館で再現できないと考えて——潜って見えるものを全部、塊で水槽を持ってこようと思いつきました。岩の間を縫って泳ぐ魚の群れ、暗がりに差し



込む陽光、海底を這うように歩く小さな水中生物。そうした美しい水塊をつくって水の中の自然を疑似体験できることが水族館の新しいステージだと考えました。」

水族館では魚を“展示すべき”という考えは根強いものの、いろんな魚が一様に泳いでいる景観を見せるという展示も少しずつ増えてきていた。中村さんの斬新なアイデアが世に知られるきっかけの一つとなった新江ノ島水族館でも、大きな水塊が人気を集めた。新江ノ島水族館は、「えのすい」の愛称で親しまれている。

「水塊の発想は、沖縄美ら海水族館で大水槽『黒潮の海』を見てからです。大海原をイメージした圧倒的な水中世界。あれだけの水量と物理的な水槽の大きさはとても真似できません。それならば、小さな水槽でも大きく見せる工夫をしようということで、水塊の展示を考え始めたのです。」

美ら海水族館は、敷地が広く大きな水槽を設置する余裕があったが、えのすいでは難しい。そこで、大水槽の迫力の代わりに「体感」を重視することに切り替えた。水中世界を体感してもらうために、水塊の展示では浮遊感を重視している。その浮遊感をわかりやすく感じさせてくれるのがクラゲだ。えのすいでも、さまざまな種類のクラゲを展示するスペースがあるが、この水族館でもクラゲは人気がある。しかも、色がキレイとか触手が長いといった珍しいクラゲではなく、たくさんのミズクラゲがふわふわと漂っている水槽に、お客さんは引き込まれてしまう。珍しいクラゲが1匹、2匹いるよりも、浮遊感のみで成り立つような水中世界に人は引き寄せられる。どんな魚が泳いでいるかはさほど問題ではなく、海の中や川の中の美しさが表れている展示に魅力を感じているのだ。



水塊の展示では、暗くして水槽の角を見せないようにするなど、水槽を意識しないような見せ方を工夫している。さまざまな技を使って海の中の景観を再現しているのだ。

ビルの谷間をペンギンが泳ぐ!弱点を武器にした逆転発想



えのすいで新しい水族館像を示した中村さんだが、東京・池袋「サンシャイン水族館」のリニューアルは、最も“非常識な”仕事だったという。

まず、水族館は高層ビルのつぺんにある。サンシャイン水族館は身近なスポットだけに忘れがちだが、考えてみれば、このロケーション自体、すでに非常識だ。

「開園当時『世界初、高層ビルの屋上にある水族館』として有名でした。ですが、その後世界で2番目が現れないんです。そもそもこんなところに水族館をつくるのが無茶だったということなんでしょう(笑)。水族館としては弱点だらけです。」



ビルの屋上という場所柄、多くの規制がある。まず重量の規制があって大量の水は使えない。天井の高さも建築基準法で規制されている。不利な条件ばかり。そこで、中村さんはその弱点を逆手に「これだけ弱点を抱える水族館は他にない。だからこそ弱点を武器にしたら、どこにも真似できない水族館ができる」と考えた。

それが「天空のオアシス」をコンセプトにした展示の工夫の数々に結実した。「狭い水量も限られているなかで、どうしたら広く見せられるだろうと考えたときに、屋上だから空を使おうというアイデアが出てきたんです。私たちには、空は広いという共通認識があるから、水槽を通して空が見えるだけで、広く感じてしまうんです。その錯覚を利用しています。」

水族館で見るペンギンは、よちよちと歩いている、あるいはじっと立っていることが多い。私たちがペンギンはそういうものだと思います。しかしここでは、水槽のはるか向こうに建つビルを背景にペンギンが気持ちよさそうに泳いでいる。確かにペンギンが空を泳いでいるようだ。

「それだけですごい浮遊感を感じるんですね。実はあの水槽はすごく小さくて頭上の浅い部分の深さは20センチしかありませんし、水量も多くありません。でも、水槽の向こうには空が見えるからすごく開放的で、水を通して見える太陽の光も海に潜ったときと同じような感覚です。そこを空を飛ぶようにペンギンたちが泳いでいく姿は見ていて本当に気持ちがいいし、リフレッシュできると思います。」



他の水族館では、ペンギンに陸上で餌を与えることが多いが、ここでは水中にまく。だからこそ餌を求めて勢よく泳ぐペンギンの姿が見られるのだ。

ただ、こうした新しい発想は、最初から歓迎されたわけではなかった。「ここではできない」と言われることも少なくなかったという。

「そこで、スタッフにも新しいアイデアを提案してもらいました。すると皆、他の人たちからは、何を言っているんだ?と思われるようなアイデアを出してきます。狭い水槽を広く見せるために遠近法を使ったらどうかという案が出てきた時は、水中で遠近法を使うなんて簡単にできないから、こうすればできると証明してください」と言い渡しました。すると、そのスタッフは遠近法の分厚い本を買ってきて勉強していました。その甲斐があって、狭さを感じさせない美しい水塊の展示も実現できました。」

周囲を巻き込み、中村さん自身も驚く発想が生まれた。こうして、一昔前には想像もしなかった新しい水族館が誕生した。

未来の水族館はぐっと身近な生活密着型に

“水族館新時代”を生み出し、ブームを起こした中村さんは、次の水族館をどのように考えているだろうか。

「まず、映像やプロジェクションマッピングと融合させるメディアミックス型は、一過性だと思います。私自身は、水族館とプロジェクションマッピングなどの映像は切り離して、それぞれ進化させていったほうが面白くなると考えています。VR(ヴァーチャルリアリティ)映像はどんどん進化していますから、そのうち水中世界はVRで見たほうが迫力があっていい、ということになるかもしれない。そうすると水族館はよりリアルな水中を感じる自然を再現できる施設になっていくでしょう。里山に行けば人それぞれによって違う発見や体験ができるような、リアルな水中体験ができる水族館が増えていくのではないのでしょうか。」

現在、VRの分野で進化しているのは、主に人間のふるまいに関してだ。だが、VRで生物をリアルに表現するには、まだまだデータが不足している。イルカが毎回同じ動きをしていたらリアルではなくなってしまう。生き物の観察が面白いのは、まさに予想できない“リアル”な行動や反応を知ることができるからだ。だが、今はまだ、今日はなんだか機嫌が悪いとか、そうかと思えば楽しそうに遊び始めたとか、そういう生き物らしさが表現できるほどのデータはそろっていない。

今後、水塊はどのように進化していくのだろうか。

「水塊とともに水の流れに注目しています。広島のマリホ水族館は、ショッピングセンターの一画にある水族館で面積にして600平米、水量も155トンと、同じ都市型の「海遊館」と比べたら延べ床は45分の1、水量は70分の1です。イルカやアザラシ、ペンギンもいません。そこで、水塊をさらに“躍動”させることで川の面白さを見せる『うねる溪流』をつくりました。その中に天然記念物のゴギというイワナを展示しているのですが、このゴギは養殖魚なんです。養殖のゴギは静かな環境で育つため尻尾の力が弱いらしく、溪流の展示に入れた直後は流されてしまってポンプに吸い込まれることがあるんです。でも、しばらくすると溪流に鍛えられて体型が変わってくる。動きも自然の川に暮らす魚みたいになってくるんですね。こうした水の流れも含めた水塊に注目しています。」



想像を超える未来の水族館の姿というならば、こういう自然の中の水の様子を、気楽に見に行かれる水族館があったらいいと思います。水を見るだけで涼しく感じるので、夏には特にいいですね。ふと思えば立ち行けるような、庭代わりに通える“サンダル履きの水族館”なんていうのも面白いかなと思います。

こうして水族館で感じられる匂いや温度、音などで自然体験が気軽にできる一方、水中生物とのふれあいが重視され、研究が進めば、家の中では、VRを利用してイルカと遊ぶ疑似体験も、簡単にできる未来も期待できそうだ。

プロフィール

中村元(なかむら・はじめ)

水族館プロデューサー。1956年三重県生まれ。80年成城大学(マーケティング専攻)卒業後、まるで畑違いの鳥羽水族館に入社し、日本初の広報部門を立ち上げた後新鳥羽水族館プロジェクトの責任者を経て副館長に就任するも、辞職して独立。新江ノ島水族館、サンシャイン水族館、北の大地の水族館のリニューアル、広島マリホ水族館新設を手がけ、いずれも奇跡的な集客増に成功させた。北里大学の学芸員コースで展示学、東京コミュニケーションアート専門学校で教育顧問として講義。全国で集客コンサルティングに携わるとともにボランティアで全国のバリアフリー観光を推進、日本バリアフリー観光推進機構理事長を務める。著書に『水族館哲学 ～ 人生が変わる30館』(文藝春秋)、『水族館の通になる一年間3千万人を魅了する楽園の謎』(祥伝社)、『いただきますの水族館: 北の大地の水族館で学ぶ「いのち」のつながり』(瀬戸内人)、『常識はずれの増客術』(講談社)など多数。

